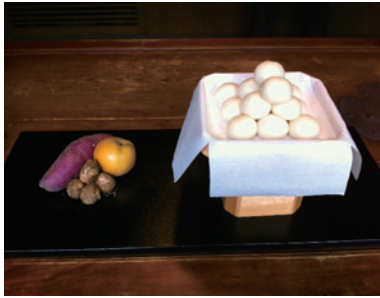


季節の室礼

季節を盛る 言葉を盛る 心を盛る

「室礼^{しつらい}」とは一年の節目に、また人生の節目節目に“季節を盛る”“言葉を盛る”“心を盛る”ことを言います。行事とは行うことであり、先人の霊を招き、客人を招き、感謝の心を供すること。その時々季節にあわせて野菜や果物、花などを盛って、もてなしを形にし、心を込めて表します。



里芋、さつまいも、有の実（梨は無しに通じるので言い換え）ほか季節の野菜や果物と、お団子を盛ります。十五夜は里芋の収穫期にあたるため「芋名月」、十三夜は「栗名月・豆名月」とも呼ばれます。お団子は十五夜の時には15個または5個で、大きさは「十五」にちなんで一寸五分。型はまん丸ではなく、丸く手のひらで形を作ってから、最後に感謝の気持ちを込めながら、上からぎゅっと押しします。

受講の感想

今回の室礼のお教室では三方の向き、奉書を敷く順序やお団子の重ね方など、いろいろな約束ごとを学びました。室礼では年中行事のもととなる自然との共生、神様やご先祖様への感謝、陰陽五行説、寄物陳思などすべてが含まれていて、毎回本当に奥深い体験をします。毎年、まん丸の十五夜のお月さまを眺めて、その完成された美しい形に吸い込まれそうになっていましたが、今年のお月見は十三夜のわずかに欠けたお月さまの、完璧ではない美しさにも想いをよせ愛でたいと思います。（熊丸梨奈）



写真：安井進

神無月（お月見）

日本では花鳥風月、雪月花という表現があるように、自然の美しさを語る上で、月は欠かせないもの。

お月見は風流な行事として伝わっていますが、収穫やものの結果に感謝を捧げる

お祝いの儀式でもあります。

また、生命の満ち欠けへの連想から、

自分に生命を繋いでくださった

祖先の霊を偲ぶ日でもありました。

旧暦8月15日（今年は9月30日）の十五夜と共に、

日本では、旧暦9月13日（今年は10月27日）の

十三夜もまた美しい月とされ、

2度の月見をするのが古来からの風習です。

山本三千子先生の著書：「室礼おりおり」(NHK出版)、「暮らしの室礼十二か月」(淡交社)、「[四季の行事]のおもてなし」(PHPエル新書)ほか。

提供：室礼三千（しつらいさんぜん）

東京都杉並区浜田山3-16-5 Tel 03-3304-7020（火～土曜日午前10時～午後5時／日・月曜定休日）●体験教室もあります